

一話一言

世七

狗

庫	文	閣	内
三二函	七〇冊	三六〇九三號	和書類

内閣文庫	
番號	和 36093
冊數	70 ( 37 )
函號	212 276



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



17290



卷之二十七 月六

日蓮上人教免状

江戶人部 寛政七年庚午

新羅寺新集序 寛政  
八丈島方言



篠木竹墨文

古本武皇澄

園中氏書

寒東院著述

方六也

換帖

海邊寺卷中書  
塘打若攬吳言  
仁慈寺春庭款  
天正水帳

應高世

威靈寺 吳州 塚執

大正十一年

二月

大正十一年二月十日

大正十一年二月十日

大正十一年二月十日

大正十一年二月十日

大正十一年二月十日

大正十一年二月十日

大正十一年二月十日

大正十一年二月十日

大正十一年二月十日



大正十一年二月十日

大正十一年二月十日

大正十一年二月十日

大正十一年二月十日

大正十一年二月十日

日蓮法印遺教氣事不允許修也

大正十一年二月十日

仍原立判

清長立判

仍平立判

光綱立判

孫江内入道

大正十一年二月十日

日蓮は神妙其事有沙光行を不慮に  
又可致敵免之也仍之仍報逆の件

文永十二年二月十日

兵部卿以兼奉

山城吾所入逆及

文永九年有蓮師極多一谷は持蓮の時  
別状のころ了 中河の二谷は思ふより

時流人罪可蒙從蓮師有別状也

若くはいつり付て

平りら

勝利

也是は流人

詩聖堂詩刻成詩聖者何杜少陵也少陵何稱詩聖  
其網羅古今集而大成後世作家無不取法故謂之  
詩聖堂者吾天民無繁於玉池之障堂也天民少小  
嗜吟咏厭棄其世業蘄然既見頭角時余方開江湖  
社聞風來者甚多天民亦入社與永且亮縱無絃筆  
論難相切唱酬往來遂有所得以感諸家信云後余  
筮仕越中平役無虛歲諸子散落詩盟為寒天民鬱  
不得志北遊信越西涉京攝其間名山諸勝足跡  
到所題詠幾遍皆搜奇抉怪遺諸空山懸山川靈秀  
之氣助成其業者也其歸而卜居於地也堂安少陵像

隱居人無不敬之  
少陵何稱詩聖  
其網羅古今集而大成後世作家無不取法故謂之  
詩聖堂者吾天民無繁於玉池之障堂也天民少小  
嗜吟咏厭棄其世業蘄然既見頭角時余方開江湖  
社聞風來者甚多天民亦入社與永且亮縱無絃筆  
論難相切唱酬往來遂有所得以感諸家信云後余  
筮仕越中平役無虛歲諸子散落詩盟為寒天民鬱  
不得志北遊信越西涉京攝其間名山諸勝足跡  
到所題詠幾遍皆搜奇抉怪遺諸空山懸山川靈秀  
之氣助成其業者也其歸而卜居於地也堂安少陵像

以詩聖為稱，見所尊尚也。又自號詩佛，蓋取張南翔  
老杜詩中佛之語也。天民性樂易嗜酒，騷客酒至從  
游甚多，又傍善書畫，最長於墨竹，當其頽然醉也，揮  
筆如風雨，數百丈紙立就，就必題詩於其上，求乞者  
各飲其意而去。天民餘興未盡，所畜絹素紙扇，至盡  
而始罷，醉而與之共醒，故一時文雅之家，無不有天  
民之詩竹。詩佛之名隆然起江湖社中，樹而幟於  
一方，實以天民為魁首焉。今茲其門人為梓詩集，天  
民東乞余序，余核其詩，清新和予，出於自然，甚似其  
為人，蓋生年盡心於南宋三家，三家之粹，結為之繡。

腸亘哉詩佛之名，以傾動一時，余老廢及見此盛舉，  
故不敢辭拙，喜而書簡首。杜少陵詩云：清詩近道要  
識子用心苦，此言也。取可以贖此集矣。  
文化庚午春正月寬齋老人河世寧

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters "中野" and "伊列".

中野

伊列

一 人般正位也方 方のち山山

中野部

因

少位口方方 方のち辛之方  
指方方方方方方方方方方

佐

中野

中野

一 人般正位也方 方のち山山

佐

日  
八又五方方方方方方方方方

佐  
高平甲日人般

御札

御列府印鑑下所 英と社つふ町見

一 人教習子以又宮口所立

の 此宮子より所立

の 此宮子より所立

人教習子及子以又宮口所立

此宮子より所立

若師部

の 此所入宮子より所立

の 此所入宮子より所立

此所御列府 印鑑下所 若師部

一の 御列府 印鑑下所 若師部

人数之物 此所

此所

寛政十一年

若師部

若師部

ハ 文書より何通也



ハムあるを候也志

- |       |     |       |     |
|-------|-----|-------|-----|
| ○トウ   | 父の  | ○トウ   | 母の  |
| ○フクジ  | 祖父の | ○タロサジ | 祖母の |
| ○モウジ  | 二母の | ○サボウジ | 二母の |
| ○シヨウジ | 田舎の | ○ゴロウジ | 田舎の |
| ○アセイ  | 兄の  | ○ゼイ   | 弟の  |
| ○ア子イ  | 姉の  | ○サコウ  | 伯父の |
| ○タロウ  | 祖母の | ○ニコウ  | 祖母の |
| ○サボウ  | 祖母の | ○ニコウ  | 祖母の |
| ○ゴロウ  | 祖母の | ○ロソウ  | 祖母の |

○ヒツテウ

七色のし

○ハツテウ

八色のし

○フト

男女ふつふつ

これら九色十男の行はてフトと

○ニョフ

女のぬい

○ナカ

ニ色のし

○テコ

三女のし

○ソス

四女のし

○チイロウ

お女のし

○アツハ

六女のし

○クウロウ

七女のし

○メイヨウシ

七色のし

○トニコ

ちのし

○ニゴロク

八色のし

○ニリヤト

色のありえのあさ

○イタリ

白と但世三村

○ヨコ

隙のし

○ヨキリ

九色のし

○セダ

似色のし

○ワセ

利便するし

○ヒヨウロウ

まりのし

○テイロソサ

十色のし

○トウギ

ねまかぬし

○テヤク

十一色のし

○シヤアノナガム

しんじのし

○ヤドル

十二色のし

○ウガアノ

花とてし

○コカヤニ

十三色のし

○モロノウテ

昔ふしのし

○アツカヒ

十四色のし

○ヒサニツク

みるし

○ソカアミダシ

十五色のし

○子ツコヒ

ちいさのし

○イデニ

十六色のし

○一ガナニ

浅くし

○ニアミニ

十七色のし

○ニアミシク

早くし

○ヨツナイリ

十八色のし

○ハツテモシヤラス

勤のし

○カワヒダラ

十九色のし

おとろち  
テロのト  
母れの子  
格らう  
りまが  
清らう

○ シヤレ	のけととろ	○ ヒヨシカニ	何れととろ
○ ア井ラシキヤア	何れととろ	○ テロ	何れととろ
○ ワセ	何れととろ	○ ヨワクテ	何れととろ
○ ノシタ	何れととろ	○ カスル	何れととろ
○ カスルナ	何れととろ	○ シヨクサニ	何れととろ
○ ハタ	何れととろ	○ モウニ	何れととろ
○ ホナイ	何れととろ	○ シヨウブ	何れととろ
○ コシ	何れととろ	○ オウケシエ	何れととろ
○ オナイ	何れととろ	○ ウルサイ	何れととろ
○ ミジヤイ	何れととろ		

○ スヒフシ	何れととろ	○ ニルフ	何れととろ
○ ヨウナシ	何れととろ	○ シグシル	何れととろ
○ ヨロケ	何れととろ	○ トシフ	何れととろ
○ トウフ	何れととろ	○ チエル	何れととろ
○ シク	何れととろ	○ イラクロウ	何れととろ
○ トニス	何れととろ	○ コシゴニナツテ	何れととろ
○ ヒヨレゲ	何れととろ	○ モヨリ	何れととろ
○ フツケク	何れととろ	○ ツルシテ	何れととろ
○ サレ	何れととろ	○ イロウ	何れととろ
○ トツテロクナスル	何れととろ	○ ハラクリ	何れととろ

○メサノナシ	イダノ	○タノツツノイ	伊らふ
○フシヤウナ	フシヤウ	○サニイ	サニイ
○サガス	サガス	○ヒシタ	ヒシタ
○シクケル	シクケル	○ウエナ	ウエナ
○タモウシ	タモウシ	○ケル	ケル
○イテニヒ	イテニヒ	○ニル	ニル
○ヨウラ	ヨウラ	○ソカニ	ソカニ
○キメヒノヒ	キメヒノヒ	○タカタ	タカタ
○タテ	タテ	○ミヨケ	ミヨケ
○ヲツビニタツラ	ヲツビニタツラ	○ツクリニシラ	ツクリニシラ
○ミシトトサモフ	ミシトトサモフ	○桃灯中鏡	桃灯中鏡
○ハフノク	ハフノク	○ココゲタ	ココゲタ
○ヒノヒボ	ヒノヒボ	○ゲイ	ゲイ
○ナカニデイ	ナカニデイ	○ツギヤレ	ツギヤレ
○ワイタカ	ワイタカ	○ワ	ワ
○ケドウス	ケドウス	○ヌスク	ヌスク
○ヒシレタ	ヒシレタ	○ヒウケスル	ヒウケスル
○ナハテヒトウ	ナハテヒトウ	○トレウムリ	トレウムリ
○ココ	ココ	○ヤウ	ヤウ
○カサトル	カサトル	○カ子	カ子

○ミル	正方のもの	○ダイサン	分付のもの
○トウヤク	後列のもの	○アロク	後列のもの
○ミル	正方のもの	○おどろワテ死テ	正方のもの
○ミル	正方のもの	○ウレヒクテ死テ	正方のもの
○ソウメイ	正方のもの	○バメ	正方のもの
○ナシヨコメ	正方のもの	○バク	正方のもの
○ケ子イダ	正方のもの	○カトウ	正方のもの
○アブキ	小蛇とあつ とらぎのもの	○ヨ	正方のもの
○コナ	正方のもの	○ニエ	正方のもの
○ヌセメ	正方のもの	○ミヤアトメ	正方のもの

○メナタ	正方のもの	○ヘコラ	正方のもの
○メタラ	後列のもの	○ヨ	正方のもの
○アロ	正方のもの	○トコサ	正方のもの
○ユキキ	正方のもの	○ココロ	正方のもの
○フングミ	正方のもの	○トボ	正方のもの
○テカ	正方のもの	○ミカ	正方のもの
○ヤキ	正方のもの	○ミヤウギ	正方のもの
○ケント	正方のもの	○シリ	正方のもの
○カナウト	正方のもの	○トシメテ	正方のもの
○ヤアヨウ	正方のもの	○アサヒル	正方のもの

- コツコメ 後の赤いもの
- カブナ 鰯のもの
- ツクメ 雀のもの
- ヘッソメ 塙塙のもの
- ケイビヤウ 塙塙のもの
- ヒイル 味のもの
- ツクメ 赤いもの
- ユケユ日 落年のもの
- 九ヶ九日 落年のもの
- チニチカラ 早花のもの
- ホメワツメ 畫眉のもの
- ベイメ 塙塙のもの
- ナブコキ 虫塙のもの
- クボナ 塙のもの
- リツカソシ 梓のもの
- ミクニ日 上巳のもの
- 七ヶ七日 他やある

守り後

- イチニチビ えかのもの
- ミツカビ ちかのもの
- イ子ツミ けしもの
- ヨメゴドノ 瓶のもの
- トミサガリ 目盛のもの
- クロナトコ 赤いもの
- イトヒキ 女腰のもの
- フツカビ 二かのもの
- ユウニチ ちかのもの
- カワフクロ 花のもの
- ミイタニ 草のもの
- サハフク 柳条と花のもの
- 四が 水もの

1

十二月十九日浮舟夜遊記

篠木廣

遊跡古人者出於欽慕也故向之二遊不惟吾輩有  
意於古者往々而為之云及至撤第三遊則舉世  
無有而唯我有焉故是遊吾輩誇以為天下之  
奇也然當寒威可畏之時毫汗難樂之候去安  
宅而暴露不就火而赴水以不知戒者謂我何求  
其或呼為癡者亦可指以為癡者亦可為狂人  
為病子皆所不辭也今錄其藥而告詞調者十  
二月十九日余歸自外奔走終日疲甚時已暮忽  
報二客在門輟洗出迎則南畝與子瓊也未暇叙寒

暄南畝先發言曰後赤壁後之志辭乃今其期何如先是嘗有是約也奈也故倥偬期至而忘其為期及聞此言也以實告之南畝曰僕亦然今雖憶之晚事尚可及故相携來邀余乃投履忘疲依然應之猶人德甫二子亦後先尋至其當邀者為子寅為士敬將分往說德甫曰子寅壯大濟勝自許其應此檄必不待三寸舌請赴之單騎而足士敬則強敵當斯寒夜自非所謂六國為一帛力西御而攻者則未易與也一座闐然共興向之何謂盤珠圓法應御音乃動士敬既起德甫亦

與子寅同來加凡七人相視而笑莫逆於心其議曰非舟之則此舉為無名乃決策東向書肆曰樂池堂在道左主人乃南畝門下之出南畝曰彼有才幹且在先遊之列不可不帶之叩門入言未既振衣而出蓋亦奇人也既買舟一人理當掩口罵詈而貌從容言溫存如知遊人意者亦奇人也彼其有道者乎抑眩暈入夢者特來佐遊事也呼此言雖誕推之於理亦不可以為必與也於是舟中圍爐環坐交臂接膝煖被擁背熱炭在前詩戰戲詭杯酒行其間德甫援琴弄曲手裏舟底



流水相得洋洋嗟夫歲闌嬉遊摘名哲之遺芳  
固是韵事况同人皆錦心繡腸耳所接皆危言  
目所得皆佳篇以情好有味之侶投鐵座無揚之  
境窮達得喪死生禍福榮辱之機冥乎靈臺舟  
府之中而一舟之外不知後有世界也蓋括天下之  
極美并古今之至難而在扁舟一葉之中不而樂乎  
其脂膏脩隨之具煎熬燔炙之擾樂池主人為之至  
辦事無不先意承旨太史公謂李陵能得人死  
力雖古之谷將不能過也今吾於南畝氏亦云舟  
行元以茗溪斷崖壁立處為限取便于回棹也

及其在舟夜寒漸迫務在遮風四窗密封唯相抗  
籍于中其間以外之任一付之楫公加之氣投機  
孔話頭入港有力者負之而走亦曾不知也遽  
爾扣之則云舟方在斜橋下甚過期所已久矣期  
所則失矣然因敗而成功亦是一奇更命益東  
既而在大川放乎中流久之得月出乃還是遊  
也妙不在江山煙波而在詩酒吟笑不在準備  
得完而在真率辦事蓋稱奇者三事非九舉  
一也人一出其不意而無有障礙二也以談笑詩  
酒代江山諸觀三也此其尤大者也至言其席次

之細興趣之詳則更僕亦難前遊二次音不讓  
告倡首是遊則南畝實為之盟主且其言曰將作  
之賦意者坡老事實必將有具焉若則鄙俚瑣  
瑣筆其末節者也耳

南畝先生之詩亦不與前及之對曰士分其  
我聞未夫然則知也知也知也知也知也知也  
南畝先生之詩亦不與前及之對曰士分其  
我聞未夫然則知也知也知也知也知也知也  
南畝先生之詩亦不與前及之對曰士分其  
我聞未夫然則知也知也知也知也知也知也

右條本竹堂先生手卷三葉

本花園所藏

海老幸名少書の中におま

年別 左條後園寺此の如く老人あり海老幸名  
と号し其跡を以てと号するに如くは海老幸名  
天正十年壬午歳生家永正己丑年 石二十八  
宅中八年辛海老幸名は海老幸名は海老幸名  
四年己卯改元 海老幸名は海老幸名は海老幸名  
後教養山御書又と号するに如くは海老幸名  
二代又号は一万余と号す 海老幸名は海老幸名  
と号するに如くは海老幸名は海老幸名は海老幸名

以入世故 在徳公の所傳又傳其為海大坂由  
 之以後の行年して軍切方し 与く不錫威威  
 子及後府以傳代其下不討其地子之內二十年  
 以後は後年と初めたるは後河ととを討ち去るは後  
 大長 在傳公の 大敵公以傳代其長を討ち去るは威也討  
 少獲中 少くは遠方止る方とてし 群臣して年一更  
 十四年傳公一揆に起し即任地 弟少間河 初めは利  
 の先公に加り 族群し 御あり 二討ち其代に更傳其後嗣  
 之向討して威威とてす 子及後河 初めは威威と  
 傳公 四十二年 嘉慶 二十年 不討其地 郡小他 四十二年

以事公に在傳公 字伝と云 加陽の歩士 初めは威威  
 其事公に在傳公 字伝と云 加陽の歩士 初めは威威  
 其の能く 義傳と云 古事と云 初めは威威  
 初めは威威 十一 在傳公 字伝と云 加陽の歩士 初めは威威  
 一 慶永 六年 丑 二月 十 日 傳公 字伝と云 加陽の歩士 初めは威威  
 中 耳目 事 公 在傳公 字伝と云 加陽の歩士 初めは威威  
 初めは威威 初めは威威 初めは威威 初めは威威 初めは威威  
 一 傳公 字伝と云 加陽の歩士 初めは威威 初めは威威 初めは威威  
 一 傳公 字伝と云 加陽の歩士 初めは威威 初めは威威 初めは威威  
 一 傳公 字伝と云 加陽の歩士 初めは威威 初めは威威 初めは威威  
 一 傳公 字伝と云 加陽の歩士 初めは威威 初めは威威 初めは威威

軍人らに送返し古物等類以て傳給し給ふ事其意以知れり  
たれとの傳へて其れを公にの代りて其れをかくしを能く  
以て其れをかくし給ふ事其意以知れり

一 兼信光重名を尚戸田重俊後裔先う田原の一也  
世たり其鐵の妙も又なれり又其の事の中一也  
其れを其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに  
其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに  
其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに  
其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに  
其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに  
其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに  
其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに

ららららら 其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに  
其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに  
其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに  
其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに  
其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに  
其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに  
其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに  
其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに  
其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに  
其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに

一 其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに  
其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに  
其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに  
其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに  
其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに  
其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに  
其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに  
其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに  
其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに  
其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに其れに

初しは別しきたる好まきかきぬ海介月と印し  
その海に居しはく命御中より及たそそ子息胆好ま  
家守し夫と之候 少きまう 思ひく海軍入事して海軍  
所池をよも 少きまの形かののしとくいのめを及た候  
中よまの候 守りらへん也書きの付城へ入候事と  
候しきよて各候事ア 一 ても候意の控り候事  
を播城へ付しはし本あき候へんところの業をり  
田舎及所印し守り候の遣候もまうと書り候  
ア 一 守り候もそれと也 地をいす候事候事候事候事  
ちり守り候の事候も書り候事候事候事候事候事候事

しよす 証候と看ふる事候也

Faint vertical text on the right page, likely bleed-through from the reverse side.

古今武士鑑

享祿九丙子年

吉野

京門幸町三葉上丁  
源光久書

右板字 拾三丁目

口 向

源光久書

Faint vertical text on the left page, likely bleed-through from the reverse side.

一 訂正 宗原良宗  
増澤

夢遊秘笈第一卷  
卜り

船名水大楸先生園

口都山呂承子明増澤

山村才助

土浦侯臣氏

古...  
...

一 皇朝... 社務... 國... 痛

九  
正

書  
保  
之  
印

紫宸殿承明門額  
筆者

一 海堯舜 既後 邪說 暴行 又作

伊藤仁三 千春稿本

戊辰仲秋吉日伊藤維楨  
謹識

己巳閏正月號 誓前一日

一 寬文... 己亥卯年九月... 于... 淨土宗 福後  
...

河内高野山真東院天台の起しし日蓮菩薩の集の  
りきとく一宗建立のあり、此宗と名く湖沼  
念佛無名の業便了念の行業と云ふは四律四戒  
起しし時とを云ふ也如くり蓮師御の決まりを  
出しし破邪の正統と云ふは正統をり蓮師の  
信よに之の練達ゆきと云ふは蓮師の  
五のり蓮師の集と云ふ

竹田代路

天正拾九年辛卯八月廿二日

我列之我取捨もくも

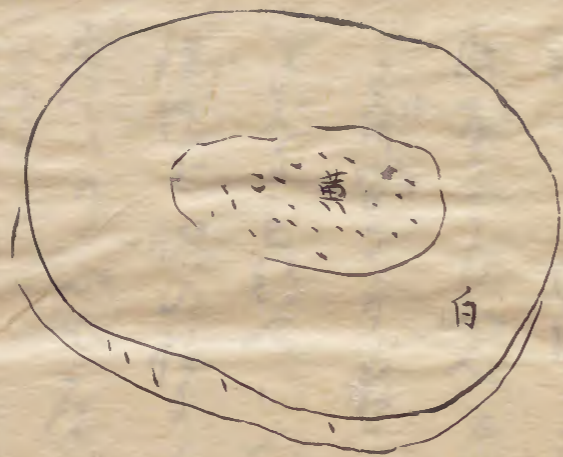
の梅

山澤

の池

右 府中布衣主 山澤山澤山澤





オ、ウセ とつよ海歟の

角ありと 蝦夷糖

千カイヤニツト子  
東(カ)トクニ

ア、ニ、ニ、イ、ツ、カ

千、カ、ヤ、ニ、ツ、ト、子、の

海、子、の

上、ト、ロ、フ、島、子、の、此、角、と

均、し、と、云

島出の島へ

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including the characters "島出" and "島へ".

一 万治年中に... 唐船の... 船... 島... 出... 島... へ...  
一 万治年中に... 唐船の... 船... 島... 出... 島... へ...  
一 万治年中に... 唐船の... 船... 島... 出... 島... へ...  
一 万治年中に... 唐船の... 船... 島... 出... 島... へ...  
一 万治年中に... 唐船の... 船... 島... 出... 島... へ...  
一 万治年中に... 唐船の... 船... 島... 出... 島... へ...  
一 万治年中に... 唐船の... 船... 島... 出... 島... へ...  
一 万治年中に... 唐船の... 船... 島... 出... 島... へ...  
一 万治年中に... 唐船の... 船... 島... 出... 島... へ...  
一 万治年中に... 唐船の... 船... 島... 出... 島... へ...

子母一母竊の如例に、  
 子の母と稱し用其帆の  
 中華  
 の書に地雷天堽地  
 佛根接等の名物あり  
 食飽の  
 一好之也  
 當世を以て、  
 子母は、  
 子母の母と稱し用其帆の  
 中華  
 の書に地雷天堽地  
 佛根接等の名物あり  
 食飽の  
 一好之也  
 當世を以て、

子母の母と稱し用其帆の  
 中華  
 の書に地雷天堽地  
 佛根接等の名物あり  
 食飽の  
 一好之也  
 當世を以て、

子母の母と稱し用其帆の  
 中華

一、  
 子母の母と稱し用其帆の  
 中華

子母の母と稱し用其帆の  
 中華

地固如似信紙公在三年 卷之四定代し之三帳左記  
ありしは凡の事自りて上

文化六年己巳十二月

支社

...

光中殿御事

光緒三號 昆河川天王御記

抑以予徳を今に中代 桓武天皇迄 曆年中車夫  
徳代以形歌の付初得方之所 自刻彫寫 果天 強建右  
吾敷也示以予 歸征夫 昆河川 至 一平場 依依 徳和

仁明文徳 徳和 御成光孝 予多 帝十代 天子 篤信 礼  
号 矣 徳和 帝才 六皇子 貞純 親王 予子 此子 天  
祈誓 乃 天下 安否 令 我家 形 乃 祈年 仁 徳 考  
不 感 不 日 昔 矣 而 汝 一 子 授 予 予 予 四 幼 而 致 予 是  
者 法 天 六 喉 四 幼 者 矣 所 持 詳 予 予 一 子 者 六 孫 王  
徳 基 也 此 等 矣 諸 祈 願 志 節 感 是 獻 回 以 感 之  
條 以 予 像 獨 負 徳 記 主 予 崇 依 依 自 身 祿 於 年  
昆河川 天王 而 後 傳 徳 基 予 傳 満 伴 予 予 授 孫 別 多 思 庄  
建 志 昆河川 天王 於 新 貴 貴 錢 界 女 不 祈 祈 考 一 不 満 是  
考 信 初 予 日 我 成 群 行 舉 世 予 君 多 田 昆河川 天王 來

原家亦傳着赴戰傷創或裏為母衣或為甲曹槌各  
臨時將軍功小建枚舉汝弟傳正史無東萊心先夜  
見不思讓靈夢乃天告曰吾係阿比田感念寺應得  
汝傳之美疾起盟傲合孝子汝謂自先祖在傳天下  
之奴一靈像子出於孝家惜亦行汝從二不復去曰  
何遲滯一疾可子爾子行身心學勤而百拜懺悔  
而子得感應矣矣於子孫恆在矣惜深痛痛毫而  
已

元和九年癸亥十月在多源義安書

源義安書

